

World as Lover, World as Self
世界は恋人, 世界はわたし

Joanna Macy
ジョアンナ・メイシー

星川淳(訳)

筑摩書房 1993

いま世界で、新聞などには取り上げられない重要な事件が起きている。私はそれを現代のもっとも刺激的かつ希望に満ちた動きと見ており、こんにち生きていることがうれしい理由のひとつにもなっている。それは、自己という概念をめぐる変化である。

「自己」とは人間のアイデンティティとはたらしきについての隠喩的な枠組であり、私たちはそのかりそめの基盤を踏まえて生存戦略を立てる。私たちが自己保存本能や自己承認欲求を発動させたり、自己利益の枠を設定したりするとき、その軸となるのは自己という概念だ。この概念に何かが起こっている。

私たちが子どものときから慣れ親しみ、正統とされる文化によって植えつけられた従来の自己概念が崩れつつある。禅者アラン・ワッツが「皮膚に閉じ込められた自己」と呼び、生命哲学者グレゴリー・ベイトソンが「西洋文化の認識論的誤謬」と看破したものが足元からぐらつき、正体を露呈しつつある。アイデンティティと自己利益に関するもっと広い枠組が、それにとってかわりつつあるのだ。他の生きものたちやこの地球の生命と共存できるという意味で、それはエコロジカルな自己、つまり「エコセルフ」と名づけられるかもしれない。ここではそれを「自己の緑化」と表現することしよう。

最近ある大学での講演で、学生たちに、たっいま地球上のいのちを守るためにどんな活動が行なわれているかを話した。そうした行動をとる人びとは、他の生物を守るためなら安楽さを犠牲にしたり、場合によっては自分の命を犠牲にしたりすることさえいとわない。たとえば北インドの「チブコ」という木に抱きつく運動では、村人たちが残された森を伐採から守るために立ち上がった。いっぽう公海上では、国際環境保護団体グリーンピースの活動家たちが、海洋哺乳類の殺戮を阻止しようとしている。その講演のあと、ここできりにマイケルと呼ぶ一人の学生がこんな手紙をくれた。

チブコ運動の参加者が私の胴体を抱きしめ、自分たちのからだでチェーンソーを阻んでくれている気がします。鋼鉄の歯を食い止めて、私に息をつかせようとする彼らの指が、樹皮に食い込んでくるのを感じます。ゴムボートに乗った菩薩たちが銚とのあいだに割ってはいり、私を深海へ逃がしてくれる様子が聞こえてきます。あなたや私のいのちに、そして生命そのものに感謝を捧げます。自分にも、チブコの人たちや海の菩薩たちと同じ力があるとわかったのはありがたいことです。

マイケルの手紙の特徴は、あるところから主語が入れかわってしまふ点だ。彼は自己感覚を、木の自己やクジラの自己を含むところまで広げることができた。木もクジラも、もはや自分と別ではなく、切り捨てていい「外部」世界の客体ではなくなっている。それらが彼自身の生命

感と一体になっている。それにいたわりの気持ちに向けることによって、彼は皮膚に閉じ込められた自我^{エゴ}を大きく超えて、自己体験を拡張することができた。ここでマイケルのことばを用いるのは、それが特別なものだからではない。むしろ、古い自己の牢獄から自由になったとき、どんな欲求や能力が生まれるかをあらわす好例だからだ。このような欲求や能力は、こんにちますます多くの人びとの中から沸き起こってきている。世界の惨状を深く見ると、痛めつけられた側に立って発言し、行動せざるをえなくなるのである。

そうした古い自己概念を脱け殻のように捨て去りつつある人のひとりに、オーストラリアの熱帯林情報センターで理事をつとめるジョン・シードがいる。ある日、同センターの事務局があるニューサウスウェールズ州の熱帯林を歩きながら、私は彼にこうたずねた。「オーストラリアの残された熱帯林を守るために伐採企業や政治家と戦うとおっしゃるけど、絶望感は抱きませんか？」

彼は答える。「ジョン・シードという自分が熱帯林を守ろうとしているのではないことを肝に銘じているんですよ。そうではなくて、この私というの自分では自分で自分を守ろうとしている熱帯林の一部なんだ、とね。私は、近ごろ人間として考えるようになった熱帯林の一部なんです」私のいう「自己の緑化」とはまさしくこのことだ。そこでは、神秘的なものと実践的なものとが結合し、分離と断片化が乗り越えられている。シード自身、この変化を「内面的な変化^{スピリチュアル}」だといい、それによって全生命との深いつながりが実感できるようになると語る。

これは人類にとってけっして新しい経験ではない。ただこれまで、詩人や神秘家たちがこ

うした発想について語ったり書いたりすることはあっても、バリケードの上から社会変革を呼びかけるような人びとがこれにふれることはなかった。しかし、このより大きな自己、より広範ないのちとしてのアイデンティティこそ、活動の原動力たるべきときがきた。私たちが惰性からいぜんとして世界の破壊を進めている力に抗して立ち上がるとき、これは勇気の源となる。この拡張された自己感覚は、的確な行動に力を与えてくれるのである。

世界の惨状を見ると——いま、水や大気や森や他の生物たちにふりかかっていることに目を向けるのは辛い——、生命を神聖視し、生きとし生けるものとの喜ばしい交感を促すようなある種の内面的実践に根ざさないかぎり、目前の途方もない課題に挑むことはほとんど不可能とも思える。

エコロジカルな自己の出現には三つの要素が相乗的にかかわっている。一つは、絶滅の危険をまのあたりにしたことからくる心理学的・内面的負担によって、従来の小さな自己、つまり自我としての自己が壁に突きあたっていること。そして、自我としての自己の解体を促す二つめの要素は、科学そのものの中から出てきた新しいものの考え方だ。それはシステム論的な見方と呼ばれ、一般システム論ないしサイバネティクスから派生してきた。この見方によると生命はダイナミックな構造をもつ自己組織化システムとして、関係によって維持されるパターンとしてとらえられる。さらに三つめの要素は、こんにち非二元論的な精神性が復活しつつあることで、ここでは私自身の仏教の経験にもとづいて話を進めるが、キリスト教など他の信仰体系や宗教においても同様の動きがある。こうした進展がこれまでの自己概念を切り崩し

たり、その古い枠や定義を壊すのに一役買ったりにしている。「エゴセルフ」にかわって「エコセルフ」が登場してきたのだ！

より広いエコロジカルな自己感覚への移行は、圧倒的な力で私たちにのしかかっているさまざまな危機に負うところが大きい。世論調査によると、核拡散と生命圏の破壊の進行をまのあたりにした現代人は、いまのような世界が終焉を迎えるかもしれないことに感づいている。私を見るかぎり、未来がかならずあるという確信の喪失こそ、こんにち最大の心理学的現実だろう。それについてほとんど語られないという事実が、その重要性をいよいよ強めることになる。というのも、ものごとを押さえつけられれば押さえつけるほど、私たちはそのことで頭がいっぱいになり、エネルギーを吸い取られてしまうからだ。

これが古い自己感覚を侵食するのはなぜか。それは、ひとたび現代の危機に目をつぶるのをやめ、アマゾンの熱帯林焼失であれ、アフリカの飢饉であれ、自分の住む街のホームレスであれ、世界の痛みに対する自分自身の反応を深く味わったなら、そこで経験する悲しみや怒りは、私たち個々人の皮膚より内側がどうこうという問題ではおさまらなくなるからだ。

生命圏の破壊に深い悲しみを抱くことと、自分の個人的な死に心を痛めることはまったくレベルがちがう。世界とともに苦しむこと——仏教用語の慈悲にあたる英語の *compassion* (痛みの共有) の原義はそれだ。それは個人的に気を取り乱すというようなこととは似ても似つかない。ところがいまから二十年前、私がベトナムの村々への米軍によるナバーム弾攻撃に涙を流していたとき、それは清教徒的な罪悪感の名残りだと診断された。またレーガン大統領の

政策に異議を唱えたと、父親とのあいだに未解決な問題があるからだと決めつけられた。政治的ないし生働学的現実への憂慮を、いつも何か別な原因に転嫁してきた大衆心理学の罪は重い。いわく、「ホームレスの人たちにそれほど同情するのは、自分の人生の何から逃避しようとしているからじゃないですか。たぶん、あなたは何か未解決の問題を抱えているんだ。もしかしたら性的に満足していないとか——」この手のやぶ診断は枚挙のいとまがない。だが、痛みの共有からくる反応が、病気でも逃避でもないという認識はますます広がってきた。反対に、それは私たちの成長のしるしであり、人間性向上のめやすである。

私たちは世界とともに苦しむことができる。そして、それこそが本当の慈悲であり、痛みの共有だ。それは私たちが全存在と結びついていることを教えてくれる。アマゾンで焼かれる木々や、ロッキーマウンテンの鉱山廃棄物によって汚される河川のことや泣くのに、弁解などいらない。そうした悲しみや怒りについて言いわけする必要はない。それはその人のハートが開いているしである。それが大きく開けば開くほど世界が癒される可能性も高まる。人びとが現代の悲惨と誠実にまみえたとき起こるのは、まさにそれなのだ。そして、これは生物学的にも健全な適応反応にほかならない。

いま地球を脅かしている危機は、軍事的に見ても、生態学的に見ても、社会的に見ても、機能不全をきたした病的な自己概念がもとになっている。それは、自分たちがより大きな世界の中のどこに位置するかについての誤認に端を発している。自己というのはひびくように孤立した弱い存在で、私たちがその領分をはっきりさせ、防衛してやらなければいけないという考え

は、ひとつの錯覚にすぎない。また、自己はじつに小さく無力だという理由で、私たちが果てしなく物をかき集め、果てしなく消費しなければいけないと考えるのも錯覚なら、自己は超然と独立した存在だから、個人、企業、国家、あるいは人類としての私たちが、他の存在をどう扱おうとさしたる問題ではないというのも錯覚だ。

もちろん、人間本性をこのようにとらえる見方は新しいものではない。「自己利益」を、全体を包み込むところまで拡張しなければならぬと感じた人びとはこれまでも大勢いた。しかし、いま私たちが置かれた状況の新しさは、アイデンティティの拡張が、高潔さや善良さや利他心を養おうとする努力によってではなく、ただ自分をとりまく現状をしっかりと見すえ、痛みを味わうことによって起こる点にある。またそれだからこそ、この自己感覚の転換が現実味を帯びてくるのだ。詩人シオドア・レトキのいうとおり、「わが身の痛みは疑いようがない」本書でいうこの「絶望と再生」の作業は、先にのべたようにもう二つの流れに根ざしている。システム理論ないしサイバネティックスと、非二元論的精神性、とりわけ仏教である。そこで次に、「自己のサイバネティックス」ともいうべきものに目を向けよう。

二十世紀科学の発見は、自己が独立していて、観測や行為の対象となる世界と別な存在だという概念をくつがえす。アインシュタインは、自己の知覚が、他の現象に対して変化するそれ自身の位置によって変わってくることを明らかにした。またハイゼンベルクの不確定性原理は、観測という行為そのものが観測対象を変化させてしまうことを示した。

現代科学、なかでもシステム科学はもう一步踏み込んで、独立不変の自己という前提そのも

のに挑戦をいどむ。経験される世界の一部を「自」、それ以外の部分を「他」と分ける論理的・科学的根拠はどこにもない、と。なぜなら、開かれた自己組織化システムである私たちの呼吸や行為や思考じたいが、私たちを通過し維持する物質とエネルギーと情報の流れを仲立ちにした、世界との相互作用から生ずるものだからである。このような活動を支える関係の網の目から、これこれの部分が独立した不変の自己だ、と限定して取り出すことなど不可能だ。

システム理論では、「絶対的な他」ないし「それ」と対立する絶対的な「自」はありえない」とされる。グレゴリー・ベイトソンの著作にはこのことがわかりやすく説明されている。

先ほど、独立した不変の「自分」という抽象概念こそ西洋文明の認識論的誤謬だという、彼のことばを引用した。ベイトソンは、決定と行動のプロセスは個人の独立した主観とだけ結びつけることもできないし、皮膚より内側だけで起こると限定することもできないとして、次のように論ずる。「情報を処理する総合的な自己修正単位はひとつのシステムと考えられるが、その広がりには肉体のそれとも、一般に「自己」ないし「意識」と呼ばれるもののそれとも一致しない」彼はこれにつづいてこうもいう、「ごくあたり前に考えて、自己とは、思考、行動、決定を行なうもつとずっと大きな試行錯誤システムの一部にすぎない」と。

ベイトソンは二つの巧みな例をあげる。一つは木を切り倒そうとしている樵^{きこり}。彼の手は斧の柄を握りしめ、その斧の刃が木の幹を狙う。ガシッ、最初のひと振り。ガシッ、次のひと振り——。ここでフィードバック回路は何か。その切り倒し行為を誘導している情報はどこにあるのか。それは循環全体であって、スタートはどこでもかまわない。情報は樵の目から木へ、斧

へ、そして木の切り口へと伝わってゆく。つまりこの循環全体が自己修正単位であり、この全体が木の切り倒しを行なっているといえるのである。

もう一つの例では、杖をついた盲人が舗道を歩く。コッソ、コッソ——おっと消火栓。こんどは曲がり角。その歩行を行なっているのは何か。盲人の自己はどこにあるのか。知覚と決定を担っているのは何か。この場合の自己修正的フィードバック回路は、手と杖と曲がり角と耳を結んだものだ。そこで歩いている自己とは、その回路全体をさす。ベイトソンがいわんとするの、いわゆる「自己」が、もっとずっと大きな複合プロセスを不当に小さく切り取って、それに具体的な形を与えるまちがったとらえ方だということである。そのうえで彼はこうのべる。

自己のこのまちがった具象化こそ、いまわれわれが直面している全地球的な生態学的危機の元凶である。われわれは「自分」というものが生存の単位であって、みずからの生存をはかるのは自分たちの役目だと思ひ込み、その生存単位を独立した個人、ないし人類という独立した種と想定してきた。しかし現実には、進化の歴史を通じて生きのびてきたのは、個人（個体）プラス環境、生物種プラス環境にはかならない。というのも、その二つは本質的に共生関係にあるからだ。

「自己」とはひとつの隠喩である。それは、自分の皮膚より内側と限定することもできるし、

自分個人、自分の家族、自分の所属する組織、あるいは人類という種といったものに限定することもできる。その境界線は客観的リアリティのどこに設定してもかまわない。しかしシステム理論の立場からすると、私たちの意識というのは、私たちを互いに結びつけるより大きな知の流れや循環経路のごく一部を照らし出すものでしかない。精神を、こうしたより大きな回路つまりベイトソンのいう「結び合わせるパターン」と共存するものととらえることもじゅうぶん可能なのである。

このような形で自己の成り立ちを広げて考えることが、私たちの独自性を損なうといった誤解は禁物だ。海の水の一滴がブラーフマン（ヒンズー教という普遍存在）の一体性に溶け去るように、自分のアイデンティティが失われてしまうのだと勘ちがいしないでいただきたい。システムの見方では、こうした相互作用によってより大きな全体やパターンが形成されると、多様性が可能になるところか必須となる。私たちはもっと自分らしくなるのだ。統合と分化は二人三脚で進む。

「エコセルフ」の解体と「エコセルフ」の創出を促す第三の要素は、非二元論的精神性の復活である。自己の成り立ちと力学に関する扱いが明快で洗練されている点、仏教は際立っている。システム理論とよく重なる形で、仏教は自他の絶対的分離を切り崩し、独立不変の存在という觀念の誤りをつく。さらにシステム理論より踏み込んで、仏教は自己を具象化してとらえるあらゆる考え方が病的であることを示す。そればかりか、そうした窮地を打開し、苦しみを癒す方法まで提示するのである。仏陀が菩提樹の下でさとしたのは、縁起すなわち現象の相互依存

的連係生起であった。そこからは、独立した不変の自己など切り離しようがない。

私たちは迷う。「自己」という難物、このやかましい「自分」というやつをどうしたものか。つねに注目を求め、つねに何かいいものをねだってくる。これは徹底的に叩くべきなのだろうか、生憎にすべきなのだろうか、屈辱を与えるべきなのだろうか、懲らしめるべきなのだろうか、それとも立派に仕立て上げてやるべきなのだろうか」しかしめざめてみればわかる。「なんだ、そんなものは実在しないじゃないか」と。自己というのはただの取り決め、便利なしきたりにすぎない。それをあまりにも深刻に受けとめすぎて、何か永続性をそなえ、守ったり後押ししたりしなければいけないものだと思ひ込んだとき、そこから迷妄がはじまる。執着や嫌悪の原因が生まれるのだ。

こうした逸脱と増幅のフィードバック回路をみごとにとらえているのが、仏画に登場する、生命の輪を抱いた閻魔（Yama）の姿だ。そこにはさまざまな存在の領域が描かれ、苦しみの輪の中央には仏教の三毒——貪欲（貪り）・瞋恚（怒り）・愚痴（迷い）——をあらわす三つの動物、雄鶏とブタとヘビがいる。三匹は互いのあとを追いかけて果てしない堂々めぐりをつづける。その輪の止めくさびになっているのが自己という觀念であり、その自己を守るなり、懲らしめるなり、私たちがとにかくそれをどうにかしなければならぬという思い込みなのである。

そうしたとき、自分の経験こそが自分であることを悟るのはなんと救いだらう。私はこの呼吸。私はこの瞬間——。しかも、それは変化している。たえまなく生命の泉から湧き上

ってくる。私たちは苦しみの輪の中の永遠のいたちごっこになど捕われていなくていい。その悪循環は、自己がひとつの觀念にすぎないことを理解したとき生まれる般若（prajna）の智慧と、禪定（dhyana）すなわち瞑想と、持戒（śīla）すなわち徳行の実践によって絶ち切ることができる。こうして経験と行為に向けられた注意力が、そのいづれについても、独立した自己の枠にとらわれる必要のないことを教えてくれるのである。

仏教はしばしばニヒリズムや逃避主義のそしりを受けるが、それはまったく的はずれだ。この解放、このめざめは、もっと生き生きとした、もっといたわりのある社会参加に向けて、私たちをあらためて世界へ送り込んでくれる。そのとき湧き上がるつながりあいの感覚は、「帝釈天宮の珠玉の宝網」（華嚴經）という大乘仏教中もっとも美しいイメージにみごとに結晶している。リアリティのとらえ方として、これはホログラフィ的宇宙観にきわめて近い。網の結び目に位置する存在たちは、それぞれが珠玉として他のすべての珠玉を映し、互いの像を反射しあっている。部分が全体を含むというシステム理論の見方そのままである。

私たちの本当の自己にめざめるということは、この網全体にめざめることであり、独立した自我の牢獄から抜け出すことにはかならない。これを感じ得た者を「菩薩」（bodhisattva）と呼ぶ。そして、私たちはみな菩薩だ。それを経験する能力は万人にそなわっているのだから——。それこそが私たちの真の本性なのだ。私たちは互いに深く結びついており、それゆえに互いどうしの、また生きとし生けるものとの、深く、複雑で、密接な共存性を認め、それを踏まえた行動をとることができる。私たちのその真の本性は、世界に対して感じる私たちの痛みの中に

すでに現存している。街角の浮浪者から目をそらすのは、私たちが本当に無関心だからだろうか。それとも、その人をまともに見ることが辛すぎるからだろうか。それを噛みしめれば、まわりの人たちのうわべの無関心も、けっして見かけどおりのものではないことがわかる。

無関心と見えるものの正体は、苦しみへの怖れである。だが菩薩は、生きとし生けるものの喜びを味わうには、彼らの痛みを味わわなければならないことを知っている。『法華経』にいわく、菩薩は天界の音楽を耳にし、鳥たちの言葉を解するいっぽうで、地獄のどん底からの叫びも聞きとる、と。

「緑の自己」、つまりこんにち台頭しつつあるエコロジカルな自己の長所は、道徳的説教を不用にしてくれることだ。講釈は退屈で、効果もうすい。このことは、〈ディープエコロジー〉の生みの親であるノルウェーの哲学者アルネ・ネスも指摘している。すぐれてシステム論的な世界観であるディープエコロジーは、どこまでもアイデンティティを拡張してゆくことによって、私たちが自然の中に織り込まれている自分を認識し、世界内の他のすべてのものからの疎外感を克服し、自己の経験のしかたを変える手助けをしてくれる。

ネスはこれを、従来とは少しちがった意味で「自己実現」と呼ぶ。そこでは、「実現されるべき自己が、独立した自我を超え、現象世界のますます多くの部分を包み込むような形で大きく広がってゆく」ネスはいう。

こうしたプロセスにつれ、利他主義とか道徳的義務といった考え方は捨てられてゆく。利

他主義 (altruism) の隠れた基礎は、反対語として「alter」をもつラテン語の「ego」である。利他主義は、エゴが他者 (alter) のためにみずからの利益を犠牲にするという前提に立ち、自分自身を愛するのと同じくらい強く他者を愛すべきだと説く。けれども、人類の中で単なる義務とか道徳的説教にもとづいて愛情を発揮できる人の数はごく限られたものだろう。あいにく、エコロジー運動がしきりにモラルを強調してきたおかげで、一般の人びとに、自分たちがある種の犠牲を求められているという誤った印象を植えつけてしまった。もっと責任感を持ち、もっと関心を示し、もっと高い道徳水準に達しなくてはいけないのだ、と。だが、もし自己が広がり深まって、自然を守ることがわれわれ自身を守ることだと感得されるようになれば、そうしたことはすべておのずと湧き出てくるだろう。

「自己の緑化」ないし「エコロジカルな自己」の出現に、善行が必要とされない点に注目していただきたい。歴史の現時点でアイデンティティの転換が必要とされるのは、道徳的説教が効を奏さず、講釈では私たちの自己利益の追求にほとんど歯止めをかけられないという、まさにその理由によるのである。

ならば、とるべき道はその「自己利益」の概念を拡張することしかない。たとえば、私があるに「どうかあなた自身の足を切り落とさないでください。それは暴力的な行為です」と懇願することなど思いもつかない。あなたの足はあなたの体の一部だからだ。しかし、同じことはアマゾン流域の木々についてもあてはまる。彼らは地球の肺だ。私たちは世界が自分の体で

あることに気づきつつある。

この「エコロジカルな自己」は、ほかのあらゆる自己概念同様ひとつの隠喩的な枠組であり、ダイナミックな性質をもっている。そこには選択がかかわってくる。異なった瞬間において、私たちのシステマティックに関係しあった存在のうち、異なったレベルや側面に自己同化するという選択が可能なのわけだ。それは餌に狙われたクジラであるかもしれないし、ホームレスの人びとや、地球そのものであるかもしれない。拡張された自己は、勇気、忍耐力、独創性など幅広い能力を動員してその同化を行なう。ちょうど神経組織中の神経細胞が、他のニューロンの発火を受けとめる準備をととのえるときのように――。

何かのための行動に立ち上がるさい、私たちがまさにその守ろうとする存在たちの分身となり、それらから応援を受けるといふ現象がある。これはキリスト教でいう「恩寵」に近い。システム論のことばでいえば「シナジー」(協働作用)だろう。こうした拡張つまり「自己の緑化」にもなつて、私たちは新たな昂揚感と活力を味わう。たえざる驚きと祝福をたずさえた、たくさんの方が流れ込んでくるからだ。

私たちは、自分が出生やその日時などに縛られた存在でないことを知っており、これまで宇宙進化のすべてに立ち会ってきたという真実にも気づいている。私たちはあらためて歴史を生きて、人類という種の物語を自分のものとして経験することができるのだ。私たちは原初の火の玉の中にも、地球がまだ煮えたぎっていたころ降り注いだ雨の中にも、また原始の海の中にも現存していた。母親の胎内で、エラと尾と、手のかわりにヒレをもった私たちは、それを

おぼえている。その記憶はいまでも失われていない。その情報はまだ私たちの中にあって、大脳新皮質や学校で習った知識のものと奥には、ある深い深い親近感が眠っている。そこには、深い英知が、宇宙全体とのつながりが、自分にそなわっていることなど思いもよらなかったような独創性が眠っている。そして、この物語に取り込むものの幅を広げていったときこそ、私たちの前にはすばらしい未来が開け、生きのびる希望も生まれるだろう。